

仲良し学級の担当になったら

「学級崩壊をおこした、またはおこしそうな先生は、普通学級の担任をさせられない。仲良し学級へ行ってもらおう。」とか「学級全体をまとめていくことはできないが、個別に対応できる先生である。」というような感じで仲良し学級の担任をきめるということが行われている。表向きは、障害を持った子どもを担当するから、力のある先生にやってもらわなければならない。また、親にもそういう話をする。そういう話をみんなはよく聞いているので、普通学級の担任になった先生は、心のどこかで仲良し学級にならなくてよかったと考えている。それが、仲良し学級やその担任への差別として表面化する。もちろん、差別している側の普通学級の先生は、口をそろえて「そんなことはない。」というが、仲良し学級の先生や子どもたちは、常に差別を感じることになる。

仲良し学級の担任になったらこの差別をしっかりと受け止めることが大切である。仲良し学級の親や子どもは、一生、この差別と向き合わなければならない。仲良し学級の担任は、せいぜい2年程度であるから、忘れないようにしたいものである。この差別感を持ち続けることが、今後の自分の教師観を大きく左右すると思う。

1. 子どもへの対応

①障害について、できるだけ専門的な知識を吸収する。

- 親、医者、特別支援教育課の指導主事などに子どもの「病気」や特徴や一般的な対応について調べて記録する。本などで調べる方法も必要である。
- この子どもの「病気」については、この学校で一番よく知っていると思えるくらい知識を吸収する。

②個別にカリキュラムを作成する。

- 子どもをよく観察する。
 - ・何ができるか。何ができないか。
 - ・何ができそうか。特に生活に役立つ事柄は。
 - ・特技はないか。特に優れたところはないか。
- 子どもをよく観察したら、その子どもその子どもに応じた個々の年間計画を作成する。一番のねらいは、「独りで生きていく力をつける。」である。年間計画を立てたら保護者と話し合って修正する。この修正は、少なくとも学期ごとにはしたい。
- 年間計画に従って、少なくとも1週間の細かい個別指導計画を立てて、指導に当たる。
- その子どもの状態によって、臨機応変に対応していくことは大切であるが、計画もなく場当たり的に毎日を過ごすことはよくない。
- 「遊ばせている」のではない。「核心に触れたゆるぎない学習」を子どもたちにさせていることを自覚すること。

③毎日教育活動を個別に記録した日誌を作成する。

- ○月○日の△時間目に何をしていったか具体的にわかるように記述すること。時間的経過にしたがって記述してもよい。

できないこと できていないことを
できるように指導するのではなく
できることをのばしてやること

2. 教師の授業力向上

若い先生が、学級崩壊をおこしたら問題点を指摘し改善の方法を指導して、次の学級作りに挑戦させるというようなことはめったにしないで、「仲よし学級でしっかり授業力をつけて、普通学級でがんばれるように」とか言って切り捨てていくのが現状である。これでは、若い先生は、育たない。若い先生は、仲よし学級の担任になることで、授業力が低下し、同期の仲間に遅れると思い大変不安になる。しかし、時間的には、やや「ゆとり」ができる。その「ゆとり」を有効に活用すること。自分の教師としての力量を向上させるための努力をすることが大切である。

①教育技術の向上

自分の年間学習計画を立てて、実行する。

Ex. 理科実験の技術・社会の資料の収集

生徒指導・地域理解

学習園、飼育舎等学習環境の整備

教育機器の使用技術

教材研究（少人数指導で「算数」等指導する場合など）

学級経営のあり方の研究。

研究会等積極的に参加して多くの授業を参観する。

神小研等研究会に所属して研修する。

②大学等へ行って、何か専門的な学問をする。

- ・兵庫教育大学サテライトなどで勉強する。（心理学や障害児教育など）
- ・通信教育で、資格を取る。
- ・語学の勉強をする。
- ・ピアノや習字、絵画の勉強をする。

なかよし学級は、教育の原点であるといわれている。

なかよし学級で学ぶことは、たくさんある。

個別対応、個別カリキュラム、個別学習 など。

何を失っているかではなく、何ができるかを見つけることだ。

そして、その子どもが、独りで生きていく力をつけてやることだ。

「ゆとり」を

1. 子どものために

2. 自分のために 活用しよう。